

今月は定型の作品にも惹かれた。定型は歴史的な経緯から文語との親和性が高く、作品を作るにあたって優位に働くこともあるが、口語を用いる場合にあっても、それとは異なる意味で（例えば同時代的であることや反権威的であること等）新たな表現の可能性を有する。そうした表現の可能性を感じさせてくれた作品をいくつか。

びしょ濡れの短歌の僕が先に行く

青木雅（埼玉県）

作品化された短歌のなかの僕と、書き手の僕とのズレが表現される。

本当の僕が担保できない状況を踏まえているという点で現代的だと思う。

君と犬だけがすべてであとは雪

細村 星一郎（東京都）

雪は分け隔て無く降り積もるから、「すべて」といったイメージをすでに内包するが、この作品では君と犬だけがすべてで、その残りが雪と書かれる。鮮やかなイメージの反転によって、君と犬との存在がどれほど主人公にとって切実なものかが伝わる。

ピーマンは寂しい野菜

空っぽが詰まっている

呉田 稔（福岡県）

ピーマンの空洞を空っぽが詰まっていると感じるみずみずしい感受性に惹かれる。

もう一度生まれてきてよ冬銀河

長谷川柊香（宮城県）

冬銀河（天の川）を生まれてくるものに喩えたのはひとつの発見だと思う。季語への直接の呼び掛けが、その発見をリアルなものにしている。

かつては海だった人

まだ少し揺れている

真島（京都府）

「海だった人」とは世界との調和のなかにあった人といったようにも読めるが、過去形で書かれていることから、それはただ喪われてしまったものとして読者に投げ出される。その喪失は、今も微かな揺れとともに続いているのだろうか。

私の耳に

シラップのように

秘密が流し込まれる間

従姉の鎖骨の窪みを見ていた

春町 美月（大阪府）

「私の耳」「シラップ」「秘密」「従姉の鎖骨」といった背徳めいた言葉の連鎖により、沈黙の向こう側にある魅惑的な時間の流れを表すことに成功している。